

創世記2章4－25節 「人の創造」

1A エデンに置かれる人 4－17

1B 園に生える木 4－9

2B エデンから湧き出る川 10－14

3B 善悪の知識の木の警告 15－17

2A ふさわしい助け手 18－25

1B 名をつけるアダム 18－23

2B 一体となる男女 24－25

本文

創世記 2 章を開いてください。私たちの学びは、2 章 4 節から始まります。前回、主が天と地を六日で造られて、それから七日目にそのわざをやめられたことを見ました。その続きですが、主は、人をどのように創られたかに、私たちを注目させます。前回、神が人をご自分のかたちに造られ、生きている物を従わせ、支配するようにされたとありました。それが、2 章ではエデンの園で行われることを見ることができます。

1A エデンに置かれる人 4－17

1B 園に生える木 4－9

^{4a} これは、天と地が創造されたときの経緯である。

これまで主が語ってくださっていたが、天と地の創造であります。けれども、これから 5 節以降も、天と地が造られた時の経緯が書かれています。この「経緯」ですが、同じヘブル語「トルドット」で、創世記はずっと書き記しています。この天と地の経緯が書かれているのは 4 章の終わりまでだと分かります。5 章 1 節を見てください、「これはアダムの歴史の記録である」とありますね。この「歴史」がトルドットです。このように、一区切りがつくとトルドットがでてきます。

^{4b} 神である主が、地と天を 造られた時のこと。

主が、「神である主が」と紹介されています。前回、1 章では「神」とのみ出てきましたが、ここでは神である主は、となっています。新改訳で「主」は太字になっていますね。これは、太字ではない「主」とは違います。後に、出エジプト記で、この方の名が、主であり、「わたしはある」という者だと、モーセに告げられます。これは聖四文字とも呼ばれ、ヘブル語では YHWH(יהוה)であり、どのように発音すればよいか分からないままです。おそらく、ヤハウエではないかと言われています。ユダヤ教では、主の御名はあまりにも聖であるので、それを口で発音することさえできないと考えて、

他の言葉に代用します。

神というのは、エロヒムです。それは、神々のように他の神にも使われますし、また御使いに対しても使われます。霊的存在です。そこで、神々と呼ばれる者たちの中で、この方こそがまことの神だとするのが、聖書の神です。そして、そのお名前はヤハウェであり、人と関わりを持つ方として現れてくださっています。

そして本文に戻ると、「**地と天を造られたとき**」と言っています。天と地ではなく、地と天を、と言っています。これから、地において人を造られるからです。

⁵ 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である主が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。⁶ ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

興味深いことに、野のはまだ灌木もなく、草も生えていませんでした。となりますと、これは 1 章では第三日の途中経過になります。下の水を神は分けられて、乾いたところが地と呼ばれます。そして、地に対して、植物を生えさせます。その間のことです。

その時に、地には雨が降っていません。雨が降るという記述は、ノアの時代、天の水門が開かれた時に初めて出てきます。それまでは、ここに書いてあるように、地の下から地に、豊かな水が湧き出ているのです。地下水が出て来ているのです。

⁷ 神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

話は一気に、六日目に飛びます。主は、人を造られた時に、どのように造られたかを教えています。これについては、午前礼拝でじっくりとお話ししましたので、そちらも聞いてください。人は、他の動物と同じく、大事のちりで形造られました。しかし、人には、神ご自身の息が吹き込まれて、生きるものとされています。その息が、神の霊であります。人は、霊を宿し、神の息によって、そのことばと御霊によって生きるように造られました。

それから、ヘブル語で書かれた聖書は、掛け言葉が多いことを以前からお話ししています。ここでは、大地がアダマと言います。そして人がアダムです。アダムのちりから、アダムを形造ったと書かれています。ですから、いかに人が、地のちりにしかすぎないかを教えています。そのはかなさにあっても、主の息、すなわち霊によって生きているのだという存在なのです。

⁸ 神である主は東の方のエデンに園を設け、そこにご自分が形造った人を置かれた。

主は、エデンに園を設けられました。これが「東の方」とあるのは、「エデン」の意味は、水が潤っているということです。豊かな水が地を潤していますが、10 節以降にそこから四つの川が流れています。そして、ここで主が「園を歩き回られた」とあります(3:8)。ここエデンは、主がおられ、しかも地上にあるということです。主の住まわれるところであります。

ここから、私たちは聖書全体で、神の住まいというものが、みこころであり、それがイスラエルの民に幕屋が設けられ、神殿が建てられる経緯となり、そして教会が御霊の住まわれるところとなり、そして、主が戻ってこられて神の国、そして新天新地の天のエルサレムへとになっていくということを学びました。ここがその始まりであり、神のみこころは、地のちりからできた私たちが、天におられる神との交わりをするということがわかるのです。

⁹ 神である主は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

主が、豊かな水で潤いのある大地に、多くの木を生えさせてくださっています。もう一度、これを書かれたものとして読み聞かせられているのは、イスラエルの民です。しかも、まだ約束の地に入っていない民です。乾燥している全域で、木というのは、いろいろな意味で、いのちそのものを示していました。詩篇 1 篇に、木の意味するところが書かれています。「1:3 その人は 流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び その葉は枯れず そのなすことはすべて栄える。」

一つは、人を生かす水が流れているところにこそ、木があるということです。いのちを示しています。次に、日陰を造ってくれます。とにかく、沙漠の日は暑いです。人を焼きます。私も、シナイ半島の日を経験しました。恐ろしく暑いです。けれども、木陰に入ると涼しいのです。乾燥して湿度が低いので、日陰になるだけで涼しくなります。さらに、食物を与えます。だから、生きることができます。そして、木が生えているのは標高が高いところが多いです。日本だと分かりにくいですが、乾燥した地域は、標高が高いと木々が見えてきます。それで、高いところに神がおられるという意味合いがあります。

ですから、聖書が今後、木の下での出来事が増えます。アブラハムが約束の地に着いて、祭壇を献げるシェケムでは、モレの樅の木のところまで行っています。後にヤコブが、シェケムで娘ディナが犯され、それで兄シメオンとレビが住民を虐殺したので、そこから出ていく時に、これまでの異国の神々や耳輪を、樅の木の下に埋めたとあります。主との生きた交わりの中で、これらを捨てますという決意でしょう。そして、新約に行けば、ナタナエルが木の下にいたことを主が言い当てておられますね。そして、メシアについての預言は、エッサイの芽から出る若枝であるとか、主ご自身

が、「わたしはぶどうの木です」と言われるなど、ずっと、このテーマが続きます。

ですから、「見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木」から実を取って食べることでできる園というのは、いのちそのものを示しているのです。

その中央に、「いのちの木」があります。天のエルサレムでは、神と子羊の御座から流れる水で、川が流れ、その両側に、いのちの木が生えていました。そして毎月、実を結ばせています。(黙示 22 章) 神の子羊にある、永遠のいのちを示しています。それが中央にあります。しかし、「善悪の知識の木」も生えています。

そして、ここでもう一つの「園」も指摘しておきましょう。ゲッセマネの園です。そこでは、潤いのある川が流れているのではなく、その反対に、血のしたたる汗を拭き出していた主が、苦しみもだえる祈りを献げられていました。そこが、アダムが犯した罪、そこから広がったすべての人の罪の贖いがあります。主が、罪によって神に引き離されるという、究極の渇きを身代わりに受け取られます。そして、肉体的にも、十字架の上で極度の脱水症状を経験され、死なれた後もローマ兵の槍によって、体内から水分がほとばしり出ます。

2B エデンから湧き出る川 10-14

¹⁰ 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。¹¹ 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。¹² その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。¹³ 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。¹⁴ 第三の川の名はティグリス。それはアッシルの東を流れていた。第四の川、それはユーフラテスである。

天のエルサレムにおいて、都の中央の御座から川が流れ出ていたと言いましたが、エデンからも川が流れています。そして園を潤して、四つの川になっています。

第一は、ピションという川です。「ハビラの全土」とありますが、ハビラは創世記 25 章 18 節にも出てきます。エジプトの隣にある地域のようなようです。ですから、エジプト方面にこの川が流れていたと考えられます。興味深いのは、そこに金が採取されて、良質の金だということです。エデンに金があることについては、エゼキエル書 28 章から分かります。そこには、墮落する前のケルブ、すなわちケルビムとして出てきます。「28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。」主の御座のそばに使えるケルビムが、神の栄光の輝きが、金という形で現れています。

第二の川は、ギホンです。これは、エルサレムにギホンの泉があります(Ⅱ歴代 32:30 等)。ギホンは何度となく、エルサレムの町の水源として出てきます。そして、これがクシュ、すなわちエチオピアやスーダンの方に流れています。アフリカです。

そして、第三がティグリスで、アッシュル、すなわち後のアッシリア帝国の出てくるところです。その東を流れていきました。今のイラクの北部です。それからユーフラテスです。ユーフラテスは、トルコを上流としてシリアを流れ、イラク南部が下流で、ペルシャ湾に流れ込みます。ユーフラテスが、聖書では大きな話題を持つ川となります。ここにあるウルの町からアブラハムは出ていき、エジプトの川からユーフラテスまでが土地として与えられるとあります。また、ユーフラテス河川にあるバビロンから帝国が現れ、また、黙示録には、ユーフラテス川に置かれていた御使いが解き放たれ、二億の軍隊が人口の三分の一を殺します。またユーフラテスが涸れて、東からの王たちがハルマゲドンに集まって来ることもあります。

そしてユーフラテスとティグリスの間にメソポタミア文明が栄えて、そこから、アッシリア、バビロン、ペルシアと、イスラエルを取り巻く大国、またイスラエルを滅ぼそうとする勢力が出てきます。

そして、これらの四つの川が流れている地域を見ますと、イスラエルの民がすべてに行っていることが分かります。ヤコブの家族がエジプトに下りました。そこで増え広がりました。また、エジプトから出て行って、エルサレムを都とします。そしてアッシリアに捕え移され、バビロンにも捕え移されます。主が、「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と命じられた祝福の命令、また、イスラエルにも子孫が増えるという約束があり、祝福がたしかに、川がこの地域に流れていくように、流れていくのを見ます。悪の勢力が、これらの川に拠点を置き、悪さをするのですが、それは言い方を変えたと、ここが、主が住まわれていたエデンの領域だから、とも言えます。

そして、イエスが仮庵の祭りの日に、立ち上がって、「わたしを信じる者は、その人の心の奥底から生ける水の川が流れ出る」と約束されたのは、言うまでもなく、こうした祝福の約束、いのちが流れ出る約束を思っていることです。

3B 善悪の知識の木の警告 15-17

¹⁵ 神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

主が、この園にアダムを連れてきました。初めに行ったのは、「置」くことです。これは安置するみたいな意味合いがあります。休ませるみたいな意味合いもあります。主が、ご自身の七日目の安息をもって、それで耕し、守らせています。

人の行う仕事とは違いますね。休む、安息するということの中での、耕すこと、守ることです。こ

うやって、私たちは神の安息があって、それで仕事をするように召されています。ここが、アダムが罪を犯した後の耕すこととの違いです。顔に汗を流して糧を得て、最後には大地に帰ると、主は後に言われます。こうしたみこころでは、初めはなかったのです。ですから、私たちの働きというのは、初めに戻れば、神の安息の中に留まり、そして働くというのが、みこころなのだということです。

¹⁶ 神である主は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。¹⁷しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

ここで、だれもが抱く疑問があります。なぜ、主は、善悪の知識の木から取って食べなさいと言われたのか？であります。これを神が置いてさえいなければ、これから起こるいろいろな悪いことが、避けられたのに、と思うことでしょう。

いろいろな解釈があるかと思います。私は、これは第一に、「神と、神のかたちの分かれ目」だと思っています。神こそが善悪の知識をお持ちです。人は、神の知識によって生き、神の霊との結びつきで、初めて善悪を判断するのであり、自分自身で判断するものではありません。神のかたちは、あくまでもかたちであり、神ご自身といのちある結びつきがあってこそ、善悪の知識があるのです。神に似せて造られています、神ご自身ではないのです。

そもそも何をもって善なのか、また悪なのか、人が知り得るのでしょうか？箴言に、何度となく、主を恐れることが知識や知恵の初めと教えられています。「箴 1:7 **【主】を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒を蔑む。**」天地を造られた主は、その知恵と知識をご自身に隠し持っておられます。この方との関わり、結びつきにいのちがあり、そのいのちの中に知識が隠されています。人を知る時に、その人とのかわり知りますね。いくら勉強したところで、その人に直接語り、対面して、初めて人格の触れ合いができて、その人の知識を持ちます。同じように、主を恐れ敬って、その中で、初めて善悪の判断ができ、それで人は被造物を治めるのです。

ですから、善悪の知識の木から取って食べれば、それは自分自身が神のようになるということで、「もう神は要りません。私が神のようになっていますから。」ということで、神から離れることになりま。それがまさに、3章で見る、蛇がエバを惑わした惑わしなのです。

では、なぜ善悪の知識の木を中央に置いたのか？それは、主を恐れるということがあります。主が言われたのだから、私は、善悪の知識の木ではなく、いのちの木から実を取って食べますという選択が与えられています。こうやって、人は主に結びついています。主の言われることに留まることによって、いのちの関係があります。主により頼むことで、神との交わりがあります。この信頼と敬いに基づいた関わりこそが、神の願われていること、人が人であることの存在意義なのです。

だから、神はその自由意志に基づく関わりがあって、初めて人を造られた意味と意義があるので、その後の世界がどんなに大変になっても、それを侵すことはできません。もし自由意志を奪い取るなら、人が人でなくなるのです。今に至るまで世界には混乱が続いています。けれども、それでも人が自ら神に立ち返ることを待っておられなければ、人を造られた意味が全くなくなってしまうのです。そして、永遠の裁き、地獄でさえ、人が最終的に神を拒むところとして選ぶことさえ、許さないといけないのです。無理やり、神の御国に入れることはできないのです。地獄に行く時は、必ず、主の愛を、福音の真理を拒んで、自ら選んでいくことになります。

2A ふさわしい助け手 18-25

1B 名をつけるアダム 18-23

¹⁸ また、神である主は言われた。「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

ここから、人の助け手、女の創造について書かれています。女を造られる始まりは、「人がひとりであるのは良くない」ということです。1章において、主がご自身で天と地を造られた時に、良かったとされていました。ところが、ここでは良くないと言われるのです。これが、女を造られる理です。

そして、「ふさわしい助け手」と言われていますが、この助けというのは、助手や助っ人のようなものではありません。なぜなら、主ご自身がご自分を、「助け」と呼ばれているからです(例: 出エジプト 18:4)。主が私たちを助けられますが、その時に、主が助けるから、主が私たちのしもべということではないでしょう。それと同じ言葉が使われています。

私たちは、この2章で人であることの意義について学んでいますが、もう一つ、人であることの意義に、男女がいて、結婚があるということも見えていくことができます。

¹⁹ 神である主は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。

主が、生き物を形造られました。けれども、それにどのような名をつけるかは、人にお任せになりました。主が、1章でご自分が造られたら、名をつけられていましたね。それを、人に任せられるのです。これは1章に書かれていたように、人に、これら動物を従わせ、支配させるためです。名というのは、聖書ではその存在の本質を示しています。名をつけるとは、付けた人が支配し、所有するような意味合いが出てきます。治めているのです。

²⁰ 人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。しかし、アダムには、ふさわしい助

け手が見つからなかった。

ここです、人が人としての本来の働きをしている時に、「ふさわしい助け手が見つからなかった」とあります。主に召されて、その中に留まっている時に、その召しを果たすのに「ああ、ふさわしい助け手だ」と思わせる存在、それが女なのです。

²¹ 神である主は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。²² 神である主は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた。

主ご自身の、いわば手術が始まります。彼を深い眠りに下されます。麻酔みたいな感じですね。全身麻酔で、手術を終えた時に、自分は眠る前と、眠った後のことしか覚えていません。自分が何かやったというものは、何一つないのです。すべてが執刀医のおかげです。それと同じように、そのふさわしい助け手は、主ご自身が一方的にくださるということがわかります。

そして、「あばら骨の一つ」と訳されていますが、直訳は「傍ら」であります。だから、あばら骨が取られたかどうかはわかりません。でも分かるのは、男のそばにいる人、かたわらにいる人ということです。日本語では、「伴侶」という言葉がありますね。良い言葉です。一生涯、共にいる人。そして自分が自分であるために欠かせない人。自分の分身ということです。

²³ 人は言った。「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」

アダムの前に女が連れて来られました。あまりにもふさわしく、それで、骨からの骨、肉からの肉と叫んでいます。これは、「この人とは、私とずっと一緒です」という契約を交わしているような言葉です。結婚式の時の誓約で使ってもいいような言葉です。そして、日本語で読むと分かりませんが、男というのはイシュです。女はイシャです。最後に「ア」が付いています。こうやって、男から出てきたことを言い表し、そうやって名づけています。

ある友人の牧師さんは、「我々、牧師たちが話して意見交換している時は、実は、それぞれの奥さん同士が語っているようなものだ」と言います。それだけ、妻の言っていることが夫に反映されているということです。伴侶、あるいはふさわしい助け手が、その人に助言していること、話していることが、本人たちの一部になっているということです。

2B 一体となる男女 24-25

²⁴ それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

これは、アダムとエバの結びつきを見て、これが男と女の結びつき、結婚の意味を書いています。まずは、男は父と母を離れます。一つの新しい世帯が始まるのです。男のかしらは、主ご自身になります。キリストがその人のかしらです。これが確立していないといけません。新しい家のリーダーとなるのです。次に、「[その妻と結ばれ](#)」とあります。妻は、自分の生涯の伴侶です。共に歩む者です。どんなことがあっても、一つなのです。

「[ふたりは一体となる](#)」とありますが、ここで使われているヘブル語は「エハド」です。「神が唯一」という時の、唯一と同じ言葉なのです。ここが、神が交わりの神であることの所以です。「われわれのかたちに、われわれに似せて」と言われた神は、複数の人格にある交わりの一体の神です。手が五本の指なのに一本の手と言われるように、靴が二つあるのに一足と言われるように、ふたりであっても、一体となります。それが、交わりの神の栄光を表しているのです。

そして、さらに教会が、キリストに結ばれている者として、このみことばがあります。パウロがエペソ 5 章で、夫と妻に対する勧めを行った時に、最後にこう言いました。「エペ 5:31-32 [「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」](#)この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」

²⁵ [そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。](#)

ここの意味していることは、「彼らは隠すものが何一つなかった」と言うことができます。神の前に出ても、そしてお互いが会っても、隠し立てすることがなかったのです。これが、神の平和であります。全てが結ばれています。神と人とが結ばれています。男と女とが結ばれています。一つになっています。この調和と平和、一致が、壊されるのが次の章、3 章に出てくることです。

いかがでしょうか？主が、人を造られる時に息を吹きかけられました。霊的存在です。そして、エデンの園を造られました。神が人と住まわれるところです。そして、多くの木が生えています。それで、いのちを得ています。そして川が流れています。これも、いのちの祝福が流れている姿です。そして、その中で創造的な働きをアダムはしているのですが、それにふさわしい助け手がエバなのです。

こうやって、神の創造の目的が分かりました。みなさんに、神の御霊がおられますか？ご自身は、神のそばにいて、いのちを得ていますか？みことばにふれ、また御霊の水を飲んでいますか？そして、交わりは保っていますか？結婚という交わりを大事にし、また、結婚していない人も、キリストにある互いの交わりを大事にしていますか？